

赤道直下食糧確保の労苦

長野県 吉田 敏久

私の住む長野県は本州屈指の長大県です。四周に蛾々たる大山岳を有し、日本アルプス、中央アルプス、南アルプス、木曾山脈など富士山に次ぐ名高い山が多く、峻険な上に荘厳さを兼ね備えた山脈です。

その中心部は、遠く南の遠州灘へ流れ出る、暴れ大河といわれる「天竜川」が流れ、その源は「諏訪湖」に発しています。この諏訪の湖水も一年で一番寒い時に氷結します。一本の氷上路が湖面を走り、上諏訪神社と下諏訪神社の「御祭神」（雄神様と雌神様）がお出合いとか。大昔から「御神渡り」の神事として言い伝えられています。

私が子供の頃は、大正から昭和初期の大恐慌時代でした。いづこも同じく貧しい家庭が多くありました。反面、子宝に恵まれて、大家族の家が多く

つ張って善光寺さんへ参詣させた」という話で、「御仏は人間だけでなく御心は動物にも通じた」ということでした。

我が家に関しては、近隣の人達が不思議がるほど家庭内は円満でした。その要素は、祖母と母が実に仲良く、実の親子でも、このようにはゆかぬと他人様が驚嘆する有様でした。その祖母がふとした病気で不帰の客となりました。我が家の重鎮だった祖母の急逝は、祖父や父親以上に母親には大打撃でしたと子供心にも思いました。私も弟や妹の面倒を見ながら家業を一生懸命手伝い、小学校も高等科まで卒業しました。

その後も引き続き農業に精励する傍ら義務化された青年学校へ登校しました。もちろん、学生は全員顔見知りの友達です。教官は退役将校と予備役の軍曹で除隊した下士官達でした。授業は一週間に三日登校で、「朝学」と云って朝六時から八時までの二時間授業でした。百人ほどの生徒を年齢別に前組、後組に分けられ、自分は前組で教官の

ありました。我が家も祖父母と両親、子供は男子四人、女子一人の五人兄弟で、私は長男として生まれました。九人の大家族でした。貧しくとも仲良く楽しく、常に笑い声のある家は自然に幸福だと感じていました。

生活は農業で、田地六反歩（自作農）、畑も自作で四反か五反有りました。米と麦が主要産物で、副業として養蚕（蚕糸業）をしており、一年に春蚕、夏蚕、初秋産蚕、晩秋産蚕と四回、桑の木の葉摘みを競走でやっていました。その最盛期は大変でした。一齡期、二齡期、養蚕作業で占有する場所も狭いのですが、四齡期、五齡期と繭作りの時には家蚕の主要部分は、全部「蚕様」に占有され、家の者は納戸一間と炊事場にいるくらいでした。これが当時の普通の農家の実態でした。

また「牛に引かれて善光寺参り」と云う諺がありますが、昔・姑と嫁の仲が悪くて、何かにつけて、姑が嫁を苦しめる姿は、まるで鬼婆のごとくだったとか。嫁の可愛がっていた牛が「老婆を引

指導時間には特に注意して勉強しました。青雲の気概燃える多感な十七、八歳の間最盛育期の教育であったと、その最大の意義を、今八十歳にして悟っている訳です。

教官の第一番の勉強指示は「五カ条」の暗記。「戦陣訓」は余力があつたら学ぶべし。「作戦要務令」は、全兵科に共通していて必順が要求されるから充分・眼を通して理解せよ、等でした。また各兵科の「操典」はそれぞれ兵科によって異なるが、作戦、戦捷上必要であるから眼を通しておくのも良いが、「歩兵操典」が中心だと思ふ。その他の「典範令」及び「刑法懲罰令」等も時間の許す範囲で勉強しました。

また特殊な事柄（特業）が出来る人は「それを申告せよ」でしたので、私は「珠算と簿記が好きです」と申告したら「軍隊にも主計は必要業務であるから充分勉強せよ」とのことでした。

一方、下士官組での勉強は、徒歩訓練に始まり、第一、第二、第三、第四と各匍匐訓練で、頭を低

くして早く進む。その次は「三八式歩兵銃の取り扱いで分解清掃、その他各種装具の取り扱いや注意事項等々でした。一番の難物は大声を出す「号令調整」でした。大きい声とは怒鳴るのではなく、下腹に力を入れ「臍下丹田」で発生することです。

昭和十五（一九四〇）年徴集の徴兵検査が有りました。これは昭和十五年八月頃でした。見事甲種合格と宣告されました。

数日後、役所から通知があり、「昭和十六年一月十日、近衛歩兵第一連隊に入隊すべし」でした。

「一月十日には郷土のためにも充分身体に注意して入営して下さい」で、役所の全員から祝福の言葉と万雷の拍手で送られ、家においては親族や近隣の人々が並んで送られて出征、入営しました。

近衛歩兵第一連隊（別称 東部第二大隊）の自分たち同期同年兵は総員百六十人、教育係将校は中隊長級の中尉一人、教育担当下士官として軍曹が各中隊一人、教育係助手は古参上等兵二人でした。四個中隊に四十人宛配分され、各小隊か分隊

と心得よ

右の五ヶ条は、初年兵の最大厳守事項でした。

夕食後は各班の初年兵はいじめやいびりの対象者として、各班（分隊）の古年次兵出来の悪いのが、悪知恵を働かせて競走でやりだしました。

第一期の検閲後に、幹部候補生試験や下士官候補生試験を受験した者は、半年余り学校へ行き、帰って来ると見習士官や下士官勤務者になる。そのため今の中に苦しめておくと、一層激しくなつたものです。一番苦しいのは「対抗ビンタ」でした。二人ずつ対面で直立させて交互に叩き合うことで、共に手加減すると「馬鹿者」と怒鳴って力一杯叩き合わせるのです。共に戦友に心で謝りながら叩き合ったもので、一番卑怯な方法でした。

ほかにも「ミンミン」「自転車こぎ」「オイラン道中」「三八式歩兵銃殿」などがありました。

第一期の検閲が真近になり、各候補生は試験準備に万全を期します。一般兵科でも、それぞれ特業（特別任務の業務）で喇叭手、衛生兵、縫工、

に五、六人の単位で配属されました。毎日の午前（前段）、午後（後段）と二回に分け同年兵集合教育でした。第一期の検閲終了まで、この集合教育とのことでした。

自分は生来頑健だった上に青年学校教育ですべて充分体得していましたから、たえず優秀な成績でした。ただし夕食後の内務班教育は無茶苦茶な「いじめ」でした。これまで私的制裁が厳しかったために不慮の事故が多発していた結果、各地の司令官名にて教育の美名に隠れて行う「私的制裁厳禁」が出されていました。

内務班・初年兵教育・第五カ条

第一 早めし・早がけ・早ぐそ

第二 軍隊は「メンコの数」食事の事で、長年

勤務した者が一番偉い

第三 要領を旨とすべし、員数の確保

第四 地方弁不使用。大声の軍隊語で話す

第五 兵器、衣服は陛下からの預かり物だ。兵隊は一銭五厘（ハガキ一枚）の消耗品だ

電工、靴工、機工などがあり、全業種が賄える」と

とく本職業務以外に取得しました。特別に軽機関銃手や狙撃手は日常訓練以上に鍛錬されました。

自分は第一期の検閲終了と同時に、昭和十六年七月に待望の主計下士官試験に合格し、下士官経理専門学校へ入学しました。これは青年学校で簿記と珠算をやったお陰です。昭和十七年三月に同経理専門学校を卒業し、現隊に復帰しました。陸軍主計伍長の階級章が眩しく輝いていました。そして同四月一日付にて、近衛歩兵第一連隊本部経理室勤務を命ぜられました。また現役二カ年勤務。予備役編入の通知を受け取りました。

戦雲は急を告げ、逐次陸軍も海軍も大打撃を受けました。昭和十九年三月、南方戦線へ第二軍野戦貨物廠編成で大動員となりました。自分も長い間、横浜にて補留勤務をさせて頂きましたが、志願してその野戦貨物廠へ転属しました。一路下関へ列車は走り、博多の港には幾十隻もの輸送船がいました。ここで自分達の貨物廠も編成替えをし

て、各々別々の船舶に乗船しました。各主計責任者は当番兵を二人を連れて、本部乗船の船舶へ出頭し主計大佐の命を待ちました。

重要書類等運搬用金庫が五、六個机の上に有りました。主計大佐は「この金庫にはそれぞれ二十万円入っている。各代表は受領書を書き引き取るように」と言われました。一般に一カ所ではなく、それぞれ分散して万一に備えての安全な方法をとったのです。内容は、一円、拾円、百円の三種類の金種でした。現在の貨幣価値とは大きく異なるために、今一つ実感が沸かないと思いますが自分達には大金でした。

昭和十九年三月、多くの輸送船団が門司港を出港しました。「嗚呼、堂々の輸送船団」です。前後左右を駆逐艦や海防艦が敵潜水艦警戒のために走り回っていました。船上には甲板上に各火砲、重機関銃などを据え付け、敵艦や飛行機に対して警戒していました。東支那海を通り台湾の高雄に寄港しました。さらに南支那海から比島寄りに船は

立て、貴重な日本米を飯盒一杯に炊き上げて、現地人に一口宛配給し、「昨夜、日本海軍が潜水艦で日本食糧を運んで来た。日本の米だ。一口ずつ食って見よ。今に日本軍が食糧を飛行機で輸送して来る。それまでにタロイモやキヤサバを譲り受けたい」といいました。十キロが一万円位だったと思います。

私の軍隊生活も五カ年半で一番の労苦は赤道直下での食料調達でした。また連合軍の空襲時に退避する間もなく、超低空飛行で機銃掃射を受けた時でした。隣に伏せていた兵隊が「やられた」と云って大きな声を出しました。衛生兵が飛んで来て大腿部から膝頭まで機関砲弾の直撃で皮膚が破れて垂れ下がり、肉は散り、真赤に血潮が流れていました。衛生兵が「少し辛抱して下さい」と云って彼の裂傷部分に自分の小便を振り掛けるという、緊急時の最高の消毒法だそうでした。肉を引上げ皮膚を引っ張り上げて三角布や包帯で急造の介護方法だと思いました。その兵士のその後の

走り、ハルマヘラ島に到着しました。諸物資を揚陸後、船舶は一目散に日本へ帰りました。

約一カ月間、毎日金庫を枕にして寝る始末でした。本部事務の「功績・陣中日誌」係と同様の事務でした。ハルマヘラでは揚陸物資が豊富なために、少し手綱をゆるめて贅沢を兵隊さんにさせました。

その内、米英と印・蘭・豪等の連合軍がインドネシアからフィリピン方面に大攻撃を加えて来ました。昭和二十年一月には、我が隊は赤道直下から南方へ、セレベス島に移動しました。貯蔵物資も少なくなり、自給自足で食料品を調達することが全軍に布告されるような事態となりました。

自分達は現金を五万円ほど持参して、奥地の原住民の住む村に行って、食料購入交換を行いました。しかし現地人は日本軍の旗色の悪いのを知り「タロイモやキヤサバは現地人の主食です。日本軍の軍票（紙幣）はただの紙切れだ」と云ってイモの一つも売ってくれません。翌日からは作戦を

消息は不明です。

自分達はセレベス島を移動しながら食料収集に全力を上げていました。そして地方の風土病やマラリヤに罹り、次から次と倒れていきました。野戦病院も満員でした。自分達野戦貨物廠とは名ばかりで、貨物即ち「食料」一切無しで、自給自足でした。自生のバナナや野草を噛りながら生命をつないだ結果、四十万円の軍票が二百キロの芋となりました。

昭和二十年八月十五日の終戦も、二、三日後に知らされました。連合軍による武装解除も無事終わって、敵軍からの食料で生き還った有様でした。軍人のみ一カ所に集合させられ、多くの部隊の兵士が集まりました。将校は別に收容されました。現地邦人や従軍看護婦さんは特別施設に收容されました。自分達は朝昼と夕食時の三度、コップ一杯の「お粥」を与えられていました。三週間ぐらいした時に作業隊を編成されて野外の道路等の作業に使用されました。

二、三カ月経過した頃、望郷の念を慰やし、ささやかな気晴らしにでもなればと、一部音楽好きな連中が連合軍に交渉してアコーディオンやギター等を借用しました。これでみんな日曜日の夜に椰子の木陰にドラム缶の舞台を作り、今で云うのど自慢です。喜んで歌う者、聞き入れる者がおり大変良いことだと思いました。そして敗戦でも戦時中の「戦友」、「麦と兵隊」「梅と兵隊」「同期の桜」「月月火水木金金」「ラバウル小唄」「上海だより」「晝に祈る」「露宮の歌」「空の勇士」「旅姿三人男」「伊那の勘太郎月夜唄」などの歌が多く歌われました。

別の収容所からもジープで来た、大和撫子の従軍看護婦さん六、七人が舞台に「白衣の姿」で立たれました。その白衣は鮮血や血濃に染まって「黄土色」をしていました。

「婦人従軍歌」

一、火筒のひびき遠ざかり
跡には虫もこえたてず

では「林檎の歌」が流行していますよと言って、下手な日本語で歌って聞かせてくれました。
私は第三便に乗船して、昭和二十一年六月、和歌山県田辺港に上陸、復員しました。五年六カ月の軍務終了し、故郷の信州へ帰りました。

吹き立つ風はなまぐさく
くれない染めし草の色

二、三、四、五、六番と聞く内に兵隊さんは、全員あの時、その時を思い起して「沈黙」でした。次いで故郷を偲びながらと尋常小学校唱歌「ふるさと」を斉唱して下さいました。

兎追いしあの山、小鮎釣りし彼の川……
十代の少年兵士も三十代の髪面の大きな男も、涙と鼻水で顔がぐじやぐじやでした。全員が現実を少し放れて心は故郷へ飛んでいました。良き演芸会でした。以来毎週日曜日には歌や軽演劇が行われました。

かくして昭和二十一年、逐次、復員船が出て、第一船は将校団と在留邦人と看護婦さん達でした。第二次まで少し時間があったので、その間、流言蜚語が飛び、元気な男性は「オーストラリアかアメリカのロッキー山脈で木材伐採作業に連行されるぞ」などの噂が流れました。

丁度その頃、ハワイの日系二世が来て、今東京

想い出をたどって

私のハルマヘラ戦記

福島県 五十嵐 正 幸

—私の軍歴—

昭和十七年

八月 徴兵検査第二乙種合格

十二月 一日 第十二航空教育隊に応召

昭和十八年

三月 第四百四戦隊へ転属

四月 第一航空路部転属要員

四月 十二日 広島へ向けて水戸出発

四月二十九日 宇品出航

五月 十六日 マニラ上陸

五月二十五日 シンガポール上陸

六月 八日 シンガポール出航

六月 十八日 スラバヤ上陸

昭和十九年